

俳句

大津俳句会

枯菊を焚いて古刹を煙らす

井芹眞一郎

数へればつぎつぎ増ゆる冬の星

秋山 恵

クリスマス第九の合唱高らかに

大塚喜久子

冠雪の阿蘇連山に夜の明けし

佐賀 久子

冬雲を洩る日の光る潦

松尾 昭雅

矢継ぎ早過ぎたる日々や年の暮

岡崎 浩子

着ぶくれて走る師走や回覧板

佐澤 俊子

俳句

つのはな句会

毛糸編む余生の色を足しながら

矢嶋 道子

立冬や足の爪切る侘び住まい

水野 春子

初日さす弥勒菩薩は岩の山

梅木トキエ

初菫子らの声するグラウンド

塚本 洋子

冬蔦を引いて一山揺らしけり

柴田しのぶ

初明り再起の炎燃え立たす

志賀 孝子

新年は大きなおほきな目玉焼き

田上 公代

冬霧に核の情報見え隠れ

木庭 杏子

亡父の居た縁側に母初陽満つ

上杉 波

短歌

大津短歌会

熟れ柿に雀集いて賑はへり美味うましと言うが如くに

管野 静

湯浴みする吾を見つめて母を呼ぶごとき声して猫なる汝れは

坂本 杲子

ありし日の友を偲びて薄茶点て亡き影に置く一服のお茶

豊岡ミツル

啄木の詩歌に酔いて明け暮れし足病みし日の杳き青春

吉永 恵子

湯煙の立つ阿蘇を背に吠えるよに瀬田の下井手音たて流る

鞍 岳志

紅葉し個性表わす公園の樹々色鮮やかに楽を奏でる

小平 善行